

壱十五の神社と祭り

## 発行に寄せて

横浜市磯子区民文化センター杉田劇場館長

中村 牧

祭りは地域をつなぎ、次世代に継承されていく大事な伝統文化です。

わがまち磯子にも、それぞれの地域、町内会ごとに独自の祭りがあります。杉田劇場では、地域創造の助成金を得て、平成三十年度から三年間にわたり、さまざまな伝承プロジェクト事業を行なっていました。伝承プロジェクトの調査・研究事業として、磯子のお祭り文化、お囃子文化に焦点を当てながら、昨年度は「磯子の祭景」を発行し、今回は集大成として、地域の祭りはどこから生まれたのか、そのルーツも含めて、地域の文化継承の糸口となる冊子、「巻十五(いそご)の神社と祭り」を発行いたします。昨年からはコロナ禍ということで、祭りの中止が相次ぎ、取材等が難しく、祭りの状況などはコロナ前に取材をした内容である点、などは、何卒、ご容赦いただきました。また、コロナ禍でありながら、ご尽力いただきました関係各所の方々には、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

本編は伝承プロジェクトの調査員として、地元でご活躍の二人の専門家に三年間にわたり調査を依頼し、それぞれの観点で、「神社と祭り」をまとめてもらい、編集をしたものです。体裁も横書きと縦書きの合本形式で、二倍楽しむことができる冊子に仕上げました。

### 縦書きの著者》

伊勢山皇大神宮権禰宜 小沢 朗氏(伝承プロジェクト調査員 磯子区在住)

お祭り文化を知るために、神社の存在は不可欠。そこで、神職である小沢氏に伝承プロジェクトの調査員として参画してもらいました。

神社ソムリエとして、当館の自主事業、「いそご文化資源発掘隊、まち歩きが楽しくなる神社のお話」の講師も務めてもらいました。



## 村の鎮守さま

私の住む横浜市磯子区は人口約十七万人、市南部にあり住宅地が多い。区内に十五の神社があり、それらはすべて江戸時代から続いている。そのほとんどが「村の鎮守さま」だ。

天保の頃（江戸時代後期）、『新編武蔵風土記稿』という地誌が幕府によつて編纂された。幕臣たちが手分けして各村を回つて取材執筆した。編集部は昌平坂学問所に置かれた。

この本は良くできている。村ごとに村名、地勢、家数、四境の村、土性、田畑、検地歴、領主、小名、山川橋、神社仏閣等のほか特記事項が順を追つて客観的に整然と記述されている。どの村の記事を見ても同じような書きぶりであるため、読みやすく、つかみやすく、比較もできる。

一村につき右記のような十余りの要素が記述されている。神社については村を代表する鎮守から小さな祠に至るまで、社名が書き上げられている。

例えば「栗木村」（現・磯子区栗木一〜三丁目等）を見てみる。

山王社：村の中ほどにあり：村民持の鎮守なり。石神社：村の北よりにあり。駒形社：村の北にあり。稻荷社：村の北にあり。御嶽社：村の東にあり。

「磯子村」（現・磯子区磯子一〜八丁目、磯子台等）はどうか。

山王社：坤（ひつじさる川南西）の方：にあり村内の鎮守なり。神明社：未の方にあり、小祠。御嶽社：（略）。第六天社：西の方村界にあり。稻荷社：東の方海岸にあり。

現在の横浜市域は、当時の四郡（相模国鎌倉郡、武蔵国久良岐郡・都筑郡・橋樹郡）に属していて、

村の数は二百余になる。村々には概ね一村に一村「鎮守」があり、そのほか数社、というのが一般的な様相だ。

磯子区域には、概ね十五の村があった。そして現在も十五の神社がある。これは偶然の一致だろうか。

その後の歴史を辿っていくと、風土記稿（江戸時代）の村々にそれぞれ一社ずつあった「鎮守」が現在に続いている傾向が見て取れる。旧磯子村の山王社は日枝大神、旧栗木村の山王社は栗木神社と名前を変えている。江戸時代までは神と仏が習合しており、神社名も仏教色のあるものが通用していた。明治維新で神仏が分離されたので、例えば山王は日枝と改称されることになった。また、その後は村の中で複数の社が集まり一村一社となった。吸収された神社はそれぞれ祭神に加わったり、境内の摂社末社などとして残されることが多かった。そうなると名称はその村名を冠した方が分かりやすい。栗木神社はその例である。田中神社、上中里神社、氷取沢神社も同様だ。これらを含んだ六社には合祀と奉還の歴史をもつが、それは後の項目で紹介したい。

ところで、私たちは地元の神社を「氏神」と呼ぶこともある。「鎮守」と「氏神」は違うのだろうか。現在、地元の神社はどちらの呼び方もされていて、ほぼ同じ意味に使われている。

しかし歴史的にみると意味合いは少し違う。村の鎮守は村の守り神である。ちなみに城の鎮守、というものもあった。氏神は氏の神様。これは古代の氏族ごとの祖先神を祭ったものである。代表的なのは源氏の氏神は八幡神、藤原氏は春日大社である。村単位で考えると、同じ先祖をもつ氏神は複数あったのだが、これが合同していくなどして一つのものとなっていくのだらう、と民俗学者の柳田国男は述べている。

村の鎮守には、村の長い歴史が刻まれているのである。

# さまざまな氏神さま

村の鎮守、氏神さまには、さまざまな神さまが祭られている。ただ、神さまの名前は難しく覚えられない、という人が多い。しかし神社の名前であれば親しみやすい。八幡さま、天神さま、白山さま、という具合である。

現在、全国では約八万の神社がある。そのうち同じ社名の括りとして一番多いのが「八幡」である。（八幡宮、八幡神社など）

「八幡」の起源は大分県の宇佐八幡である。平安時代に京都近郊の石清水へと勧請され、鶴岡八幡宮は鎌倉幕府の守り神となり、各地へ広がっていった。

二番目に多いのは「伊勢」である。伊勢の神宮には皇室の祖神が祭られている。東国に伊勢神宮の領地が設けられていったことにより、「神明社」などの社名で広まっていった。

三番目は「天神」。平安時代の貴族・学者で不遇の死をとげた菅原道真を祭る。当初は道真の崇りを恐れて京都に北野神社が創建されたが、後には学問の神様として全国に勧請される。

以上の上位三社で全体の二割を超える。

四番目以降は、「稻荷」「熊野」「諏訪」「祇園（八坂）」…（以下略）となる。

これらは、平安時代に皇室等が崇敬した名社の神々が地方の村の守り神として勧請されたものだ。勧請の波には地域差があつて、現代の分布もそれを反映している。

ここまでの話は、平成初めに神社本庁の全国調査によって把握された神社名等を基礎に國學院大學

が分析した結果に基づくものだ。都道府県別の数値も明らかにされている。

横浜市内の神社名などから信仰分布を探ってみよう。一番多いのが「伊勢」、次が「八幡」、三番目が「杉山」であった。以上で全体の約四割を占める。全国に比べ、一位八幡、二位伊勢の順序が逆転しており、三位に「杉山」という、この地域独特の信仰が入っているのが特徴といえるだろう。

『新編武蔵・相模国風土記稿』は江戸後期の地誌である。ここに村ごとの社が列記されている。横浜地域分すすべての社を抜き出すと百九十五か村に八百三十九社となる。そのうち「鎮守」となっている百四十六社について分類すると、一位が「伊勢」と「八幡」で同数、三位が「杉山」である。四位以下も含め現代における、市域全体の分布と概ね同じである。現存する神社はほとんどが江戸時代から続いており多くが村の鎮守であった、という大きな流れと合致する。

杉山神社とは、鶴見川流域を中心として町田、川崎、横浜の三市域にのみ存在する神社群である。ほとんどが「杉山神社」という社名をもつ。古くは平安時代初期に編纂された『延喜式』に記載された神社であるが、当時の所在地など詳しいことは分かっていない。そのため地域史上の謎として関心を持つ人は少なくない。

関東地方では、「杉山」のほかに下総国の「香取」（千葉県）、武蔵国の「氷川」「久伊豆」（埼玉県）といった神社群がある。それらは地域ごとの河川流域に集中し、住み分けができている。

「八幡」「伊勢」といった全国的な神様にも地方偏差があり、その地方限定の神社もあることなど大変興味深い。村ごとに、どのような理由によって、それぞれの神さまを勧請して来たのか、昔人の思いを想像してみるのも面白いことである。

磯子区内の十五神社をみると、八幡系が四社、白山系・山王系がそれぞれ二社であり、他は一社ずつとなっている。興味深いのは神様がそれぞれの地に祭られるようになった経路である。海からやっ

てきたのが、八幡橋の八幡神社そして根岸の八幡神社、中原の熊野神社である。どちらも埋め立て前には神輿の海上渡御があったという。鎌倉ゆかりの由緒をもつのが岡村天満宮、森浅間神社、杉田八幡宮、若宮御霊神社の四社。それぞれに磯子区の歴史的土地柄を感じさせてくれる。



# 神さまとその居場所

日本の神さまは八百万（やおよろず）の神、と言われるように数限りなく多い。いわゆる多神教である。この日本列島において、長い間（およそ千数百年以上にわたって）私たちと共にいる神さまたち。そのことに思いを巡らせてみたい。

日本古来の神さまのことを、江戸時代の国学者本居宣長は、次のように定義している。現代語にて紹介する。

すべて神とは、古い文献（『古事記』や『日本書紀』など）に載っている神々をはじめ、それらを祭る神社におられる御霊をも言う。また、（実在していた）人や鳥や獣、木草の類、海山など。そのほか何であっても世の常ならず、すぐれたことがあって、恐れ多いものを神と言うのだ。すぐれた、とは尊いこと、善いこと、功なることなどの優れたものだけを言うのではない。悪しきものや奇（あや）しきものなども、常識以上にすぐれて恐れ多いものを、神と言うのだ。

宣長の定義に沿って、神さまを整理・分類してみると次のようになる。

- (一) 『古事記』『日本書紀』に載っている神（天照大神、大国主命など）
- (二) 実在していた人物（菅原道真、徳川家康など）
- (三) 鳥獣、草木など動植物や海山などの自然（巨木、巨岩、滝など）

(四) そのほか、常識を超えてすぐれたもの、恐れ多いもの

(五) すぐれたとは、尊く、善く、功なるものだけでなく、悪くあやしきものなどもある  
それぞれに関する例を挙げてみよう。

古典では、最高神天照大御神は太陽の神かつ皇室の祖先神であり、大国主命は国土開発の神である。実在の人物としては天満宮の菅原道真、東照宮の徳川家康がいる。自然環境としては、山や滝を御神体とする例もあり、そうでなくても神々しさを感じさせる場所は各地にある。現代風に言えば「パワースポット」だ。そのほか常識外れのすぐれたものには悪いものも含めるとあるから、風水害など自然災害をもたらすのも神だし、厄災や祟りをもたらす神もいた。

私たちの遠い祖先は、尋常を超えた現象や環境に神を感じて、そのような場所にてお祭りをした。時に喜び、時に怖れ、また良いことがあるようお願い、災いがないことを祈った。千数百年にわたる、そのような営みが多種多様な神さまを生んできた。

お祭りの場は、そのときだけ野外に設えられたが、やがて常設化されて神社になった。だから、古くからある神社の立地は、神さまを感じることでできる場所なのである。

実際の場所としては、このようなところだ。(○内は磯子区内の神社)

ア 丘の中腹にあり社殿の背後に森があるところ(日枝、熊野)

イ 社殿は平地にあるが後ろに山があるところ(根岸八幡、杉田八幡、(上町)白山)

ウ 丘の頂にあり見晴らしが良いところ(岡村天満宮、森浅間、峰白山、栗木、田中、上中里)

エ 水辺や交通の要所にあるところ(八幡橋八幡、若宮御霊、金山、水取沢)

上町にある白山神社について付け加えておきたい。この神社は『新編武蔵風土記稿』「根岸村」の項に記載されている「白山社」が以来約二百年も続いているものだ。宗教法人としての神社ではないが、地域の人たちが大切に祭ってきた。上町の平地の住宅街の一角にある社殿の裏には根岸の丘が立ち上がっている。神さまにふさわしい立地といえる。

後世に場所が移された場合もあるが、それでもやはり然るべき所にあるものばかりだ。その時関係した人たちが、祖先から受け継いだ感性を総動員して、地域のなかで相応しい場所を選んだのだろう。神社のある場所、つまり神さまの居場所とは、この列島に暮らす人たちが千数百年以上かけてつちかってきた感覚の現れである。まさしく、風土に根づいた文化資産と言えるだろう。

## 町を清める 「神神輿」

横浜市磯子区に旧根岸村の鎮守、根岸八幡神社が鎮座している。村域は東西約三キロ、南北約二キロと広く、現在一部は中区になっている。高さ数十メートルの丘が続き、端は崖となり、かつては少しの平地を隔てて遠浅の海になっていた。崖下に建つ八幡神社の背後には緑豊かな社叢林がある。海上に出現した八幡神を祀ったと由緒を伝えている。

同社の夏祭りには「神神輿（さかきみこし）」という個性的な神輿が出る。かつては村内の山から神を集めて神輿を作り、海上渡御も行っていた。昭和三十年代後半、海は埋め立てられ神神輿の伝統も途切れた。しかし、現中区根岸町の人びとによって昭和六十年に復活し、以後三年ごとに行われている。平成二十四年には横浜市指定無形民俗文化財になった。

神神輿とは、縦四メートル、横二メートルの担ぎ棒二本ずつの中央交叉部分に台座を置き、そこに神を一枝ずつ丁寧に取り付け、高さ三メートルほどの円錐形になるよう整えたものだ。重さは四百キロを超える。通常の神輿は神社の社殿を模し華やかな造形・色彩である。一方、神神輿は緑一色で地味に見える。これを補うように担ぎ手の男たちは女物の派手な襦袢をまとい化粧もする。掛け声と共に神輿が動く円錐形の神が上下に大きく揺れる。

祭当日、神様は神輿に遷って町内を巡る。神道行事ではまず「清め」があり、「祓い」が行われる。神神輿の製作から渡御の様子を取材させていただきその実際がよく分かった。

根岸町には一条の滝がある。祭当日の三週間ほど前、この滝壺が高圧の放水で洗浄される。一週間

後に2トン車一杯の榊が到着し、清められた滝壺で水を十分に含ませたうえで製作が始まる。その日のうちに形ができあがり、当日までの一週間、毎日早朝から絶え間なく水やりをして鮮度を保つ。祭前夜、神職による御霊入れが行われる。翌朝榊に幾つもの紙垂が取り付けられ準備が完了する。

祭当日は神社でお祓いを受け町内を巡行する。行列は、囃子の車、榊神輿、子供神輿、花山車の順だ。囃子は神輿に先立って笛、太鼓、鉦の音で町を清める。榊神輿が揺れると葉擦れの音がして、これもまた清めになる。行列後部には数人のお掃除隊がつく。榊神輿から落ちた葉などを掃いて清める役だ。

盛夏の一日町内を巡った後、夕方御酒所の前で最後の盛り上がりとなる。かつて榊神輿はこの辺りで海に入ったという。海に穢れを流す、との意味合いもあったようだ。最後に榊は外されて皆が自宅に持ち帰る。

榊神輿の担い手は町内で消防団活動をしている人が多いという。日頃から町の防災を担いつつ、町の安全を祈る祭にも奉仕する。囃子や裏方も町に住む人たちだ。

榊神輿とは珍しいものだが、考えてみれば、榊の枝は日本の祭に欠かせない。古事記にある「天の岩戸伝説」では、隠れた天照大御神を呼び戻そうと神々が集まり神話上初の祭を行った。そのとき祭場の中心に設えられたのが「眞賢木（まさかき）」であった。祭はもともと野外の清浄な場所で行われたものであり、それが常設化されて神社になったという。社殿がない時代では地表に榊を立てて神祭が行われた。榊は常緑樹で生命力の象徴だ。祓の祭具などにも用いられているし、神棚や祭壇になくはならないものだ。

榊神輿のありようは、祭り古来の姿と結び付く、地域の貴重な文化資源なのである。

# 海辺の神社と山岳信仰

今から数十年前、根岸湾の海岸は埋め立てられ工場用地になった。それ以前、海辺の村では舟で漁をして暮らしをたてていた。私の住む横浜市磯子区は、その名のとおり海に面した土地であることから、海から神体が流れ着いて神社になったという由緒や、埋立以前にはお祭りで神輿を担いで海に入っていたことが伝えられている。

そのような海辺の村の神社を管理していたのが、山伏としての活動をしていた修験の寺院であることを知り、意外な取り合わせに興味を引かれた。

二百年ほど前、江戸時代の終わりごろの地誌『新編武蔵風土記稿』には、村々の神社や寺院についての記載がある。海に面した小高い山にある森浅間神社の項をみると、村の鎮守であり松本村修験権現堂が持つ、とある。

松本村は神社から数キロメートル離れている。この権現堂は鎌倉扇ヶ谷から移ってきたもので、京都聖護院を本山とする末寺であるという。今でも、森浅間神社の境内には、朝日不動滝があり不動明王が童子像二体を従えて祀られている。不動明王は平安時代初期から密教（真言宗、天台宗など）が盛んになるにつれ尊崇された。紛れもない仏像である。

平安時代中頃、熊野詣が盛んになった。白河上皇の熊野詣の先達を務めた園城寺の僧、増誉はその功績によって洛東に聖護院を賜った。以後、同院は熊野をはじめとする全国の霊山で活動していた山

伏の組織化に成功、本山派と呼ばれる天台系修験教団を成立させる。江戸時代末までの長い期間、全国の修験者（山伏）を統括してきた。末寺は二万を数えた。修験は古くからある山岳信仰と密教とが習合したもので、それが神社の管理にも携わっていた、ということである。

森浅間神社は、森公田村、森雑色村、森中原村という三村の鎮守であったが、中原村には熊野社という別の神社があった。この熊野社は隣にある泉蔵院という寺が持つっており、これもまた鎌倉から移ってきたもので、本山修験京都聖護院の末寺であった。

この中原村の泉蔵院と松本村の権現堂とは、同じ修験の寺院として、久良岐郡五十一か村のうち、八か村は権現堂が支配し、残りは泉蔵院が支配していたという。

山伏とは、山に伏して仏道の修行をする人である。熊野、吉野などに始まり、東北の羽黒、関東の日光、中部の富士、白山、中国の伯耆大山、四国の石鎚、九州の阿蘇などが修行道場として栄えていった。一方、地域に定住して氏神の別当、加持祈祷、登拝の先達などの活動もするようになった。山伏は霊山高峰に分け入り厳しい修行によって鍛えられた心身と薬草などの知識によって、様々な面で人々に奉仕することができたのだろう。明治より前の約千年間には多様な信仰の様態が存在していたのだ。

『新編武蔵風土記稿』が編纂されて約四十年後、今から約百五十年前の明治初年、神仏分離政策により、神仏習合は幕を閉じた。修験道もまた廃止となった。このような国家管理は戦後に解消された。神社では部分的に習合儀礼を復活させている例もあるという。大都市横浜の海辺の町で山岳信仰と神社との連携をうかがい知ることができるのも、その一端と言えるだろう。

# 戦後に再建された七神社

磯子区西部の洋光台、田中、栗木、上中里、峰、氷取沢には七か所の神社がある。それらには意外な来歴がある。

七社はいずれも江戸時代後期には存在していた歴史ある社だ。普通に考えれば、その頃から今までの少なくとも約二百年間、静かにその地に鎮座し続けていたと思うところである。しかし実際の歴史はそうではない。百年ほど前の大正時代から昭和二十年頃までの約三十五年間、事実として一社しか存在していなかったのである。

昭和六年刊行の『横濱市史稿』はこう記す。磯子区栗木町の「上笹下神社」は明治四十一年神奈川県指令により近隣の九社を栗木の日枝神社に合併、栗木町・上中里町・氷取沢町・峰町・矢部野町・田中町の総鎮守とされた。

これら六町は上笹下神社において合同でお祭りを行っていたという。神社合祀は明治政府の政策によるものだった。

終戦を契機に社会体制は大きく変わった。上笹下神社の六町は氏子の総意・熱望により、それぞれ旧社地に社殿を再建することになった。昭和二十二年、上中里・氷取沢・峰・矢部野・田中の五町では上笹下神社から御神座を奉迎、新しい仮社殿にて盛大なるお祭が行われた。同時に上笹下神社は栗木神社と名を改め、栗木町だけの鎮守となった。敗戦直後のこの頃、喪失感や無力感もあっただろ



うし、食糧をはじめ物資は欠乏していたはずである。それなのに各町がそろって神社を戻そうと動き出し実現させた。その熱意と行動力には驚くばかりである。この六町は現在でも結び付きがあり、助け合ったり、合同行事を行ったりしている。

明治末には横浜だけでなく全国的に多くの神社が合祀され数を減らした。それらのうち戦後再建された例は幾つか聞くが、一地域で六社が揃って奉還されたのは珍しいのではないだろうか。

それから約四十年後の平成元年、さらに一つの神社が再建された。現在の若宮御霊神社である。これもまた古くから続く若宮八幡社と御霊権現社という社であったが、明治末に別の神社に合祀されていた。昭和四十年代、この地域では大規模住宅地造成に伴い区画整理が行われ、旧笹下町の一部は新しい街、磯子区洋光台に編入された。全国各地からやってきた新住民の暮らしも安定してきた昭和六十年頃、旧笹下村の鎮守を復活させようという声があがった。新旧住民が協力して再建が成し遂げられた。元の社地に陰宮を祭りながらの念願だったという。

明治以前から二百年以上も地域を守ってきた社は明治末に統合されたが、人びとの尽力で戦後に再建を果たした。素晴らしい再生力・地域力だ。私たちの地元はかくも豊かな文化資産をもっているのである。

# 祭礼行列、神輿と山車と囃子の話

令和二（二〇二〇）年は、コロナ禍のため全国で多くの祭が大幅な縮小もしくは中止となった。磯子区内も同様である。楽しみだったお祭りに行くことができず残念に思う人も多かったことだろう。感染拡大防止のために密を避ける、ということではやむを得ない。そのような今、祭りとはどのような起源をもち発展してきたのかを考えてみたい。

祭の始まりといえは、『古事記』や『日本書紀』にある「天岩戸伝説」がある。

その昔、神々が住まう高天原で事件がおこった。太陽の神である天照大神（あまてらすおおみかみ）が岩戸の陰に隠れてしまい、日がささず世界が真っ暗になってしまったのだ。そこで神たちは集まって相談した。天照大神に戻ってきてもらうために、お祭りをしよう。それぞれ役割を分担して会場に榊などを立て、きれいに飾り付けをして、たからかに祝詞を読みあげた。そして踊りを得意とする女神が桶の上で乱舞した。楽しい雰囲気誘われて天照大神は岩戸からお出ましになり、太陽が再びこの世界に戻ってきたという話だ。困ったときに皆でそろって祈り楽しくする、というのが祭りの原点といえるだろう。

祭の日、神社では神事が厳粛に行われる。町では賑やかな祝祭が繰り広げられる。

神輿は神さまの乗り物である。祭のときには神社からお出ましになり、町のなかを巡る。歴史上神

輿が初めて登場するのは奈良時代。東大寺の大仏開眼のときだという。賑やかに、また威勢良く担がれて町を練り歩く神輿は、日本の祭の象徴、中心と言えるだろう。

山車は、平安時代には天皇代替わりのときの大嘗祭に（だいじょうさい）るお米を献上した国郡が他の産品を積んで都を引き回したのが原型という。山車は動く建築物であり、様々な飾りをしたり、舞台となったりもする。その役割は地域内を巡幸する神さまを迎え、舞や囃子で活気や彩りを加えることにある。

中世になって京都の町が発展すると祇園祭など都市祭礼がますます盛んになった。江戸時代になると、中心地となった江戸の町で新たな発展をとげ、各地にもまた広がっていった。

祭礼の行列には、神輿、山車が出て、賑やかな祭囃子が加わるようになった。囃子は笛、太鼓、鉦で構成され、演奏者は山車に乗ったり歩いたりして音楽を奏でる。山車の飾り物も工夫が凝らされ、踊り手なども加わり、全体に華やかで見せる要素が強くなった。

このような形は江戸後期に確立し、明治から大正になってさらに盛んになった。道路に電線などが多くなり、行列の大勢は高さのある山車から町神輿に代わるなど、さまざまに変遷を経て、今日に伝わっている。

近年では、祭礼行列の担い手の高齢化、人手不足、次世代への継承などの問題も聞く。一方で平成二十八（二〇一七）年には日本各地の三十三の山、鉾、屋台行事がユネスコの無形文化遺産に登録されている。

磯子区内には十五の神社があり、それぞれにお祭がある。祭のうち、最も盛大なのが例大祭と呼ば

れるもの。多くは八月もしくは九月に行われる。平成三十年、令和元年で、祭礼行列も何社かを拝見した。そのうち、八幡橋八幡神社では大切にされている宮神輿を境内の蔵から出し御霊入れののち、先導車を頭に見事な行列を組んで町へと繰り出されていった。杉田八幡宮では、多くの担ぎ手が集まり宮神輿を威勢良く担ぎ、杉田地区内の幾つかの御旅所（おたびしよ）を巡幸して回っていた。その活気は町の底力を感じさせてくれた。岡村天満宮では十基の神輿の渡御が見事であると聞き、令和二年を予定していたが、かなわなかった。次の機会を心待ちにしたい。

祭とは、元々災いを取り除くために皆で力を合わせて行ったものだ。近いうちに、賑やかな祭礼行列を再び目の当たりにするときが来るはずである。そのとき私たちは新たな思いを持って、行列に大きな声援を送ることだろう。

# 崇神天皇の疫病対策と克服

令和二（二〇二〇）年は『日本書紀』成立千三百年の年である。奈良時代の初めに成立した我が国初の歴史書であり、『古事記』と並ぶ神道古典としても知られる。一方、今年は人類史上特筆されるであろう疫病禍の年になってしまった。毎日、感染者数増加や対策が報道の中心であり、私たちの最大関心事だ。

ここでは『日本書紀』「崇神（すじん）天皇」の項にある疫病対策とその克服について取り上げる。

崇神天皇は第九代開化天皇の第二子として生まれた。性格は、是非善悪を弁別する能力に優れ、若くして雄大な志をもち、勇敢だが寛容で謹み深く、神を崇敬していた。常に広く天下のことを思う心があった。十九歳にして皇太子になり、父帝崩御後に即位、四年目までは祖先の跡にならない、臣等と共に大過なく天下を治めていた。

ところが五年目、事態が一変する。「国内に疫病が広がり、死亡者が相次ぎ国の半数にも及んだ」。翌六年目には、民の離反などもあり、治世が難しくなった。天皇は神に許しを請うた。このとき、天皇の御殿内には天照大神（あまてらすおおみかみ）と倭大国魂（やまとおおくにたま）という二柱の神が祭られていたが、神の勢いが恐れ多くて共に住むことができない、と外に移っていた。

七年目の二月、天皇は善政ができないことを神に謝罪し、災いが次々おこる原因を占ってみることにした。このとき、大物主神（おおものぬしのかみ）を敬い祭れば必ず平穏になると教えられ、その

とおりにしたが効果はなかった。天皇は自ら斎戒して殿内を清めて、更なる教えを乞うた。そうしたところ、天皇と側近の夢で、大物主と大国魂の祭主が指名された。

十一月、大物主神にはその子大田田根子（おおたたねこ）を、倭大国魂神には長尾市（ながおち）を祭主とした。その後、全国の八十万の群神も祭った。すなわち神社の制度を定め、神戸（かんべ）という経済基盤を設定した。ここに至って感染症はやつと収まり、国内が落ち着き五穀は実り人びとは潤った。

さて、この一連の話から今につながる重要なことを幾つか見出すことができる。

一つめは、神さまを祭る場所が家の中から公共の場になったこと。二つめは、それぞれの地域で神様を守るようになったこと。三つめは経済的に支えるしくみ（現在ではお賽銭の習慣など）ができたこと。

古今、疫病対策には医学的な感染防止と精神的な不安解消の二面がある。地域ごとの守り神が公共の場に祭られ、かつ維持する仕組みがあることで、人びとは安心して神の祭に参加することができた。感染防止策としては今日でいう手洗励行や外出自粛などが周知され、一緒に平癒を祈り共感しあうことで不安を解消することができたであろう。

神を祭るということは、このような感染症による危機を克服した話を原点の一つにもち、時代ごとに受け継がれつつ、今日まで千三百年も続いてきたのである。

# 祇園祭と疫病退散

前項で、成立千三百年の『日本書紀』から崇神（すじん）天皇の疫病対策をご紹介した。ここでは同じく『日本書紀』のうち、歴代天皇以前の神代紀の英雄、素戔鳴尊（スサノオノミコト）に関する疫病退散のお話しを紹介したい。

スサノオは、最初に地上につかわされた神イザナギの子。生まれた時から猛々しく大声で泣き、下の国に追いやられることになる。姉アマテラスを高天原に訪ねるが、ここでも乱暴狼藉をはたらき、罰を与えられ追放されてしまう。

しかし、地上に降り立ったスサノオは、土地の人びとを長年苦しめてきた怪物ヤマタノオロチを退治して地域に平和と安定をもたらす、という大功績を上げる。その地で結婚して子をもつに至った。神代の雄となったスサノオは別の逸話ももつ。書紀と同時代の『備後国（びんごのくに）今の広島県東部）風土記』逸文（部分的に伝わる文）に「蘇民将来」伝承がある。スサノオが長い旅をしているとき民家に宿を求めたところ、蘇民将来という者が貧しいながら心づくしのもてなしをした。スサノオは後年御礼のためその地を再訪。「後の世に疫病があれば、蘇民将来の子孫なり、と言って茅の輪を付ければその家の人は疫病から免れよう」と約束した、という話だ。

この勇者スサノオと、インド祇園精舎の守護神であった牛頭天王（ごずてんのう）が習合して京都祇園社を中心とした祇園信仰が生まれた。

疫病流行は、平安京の人びとにとっても重大な脅威であった。貞観五年（八六三）御所内の庭園で行われた御霊会（ごりようえ）を始めとし、同十一年には諸国の疫病鎮圧を祈念して六十六本（当時の国数）の矛を立て神輿が神泉苑に運ばれた。これが今日に至る祇園祭の起源となった。

平安中期になると京の町中に「御旅所（おたびしよ）やわた」が設けられる。神社から神様が神輿によって移動して一時滞在する施設だ。神輿の一行には、祭衣装をまとい楽器を奏する楽人などの芸人や神木・御幣や騎馬が行列をなした。

平安後期になると鉾が登場する。歌舞・音曲・相撲・演劇などが催され、貴族をはじめ都市住民にも参加や見物が許され賑わいを増していった。そして室町後期になると現在のような形の鉾と山の装飾になった。応仁の乱で停止された祭礼も三十五年後に復興する。その原動力は京都の町衆たちの熱意であることは言うまでもない。

京都祇園社を中心とする疫病除災の祇園信仰は全国に展開していった。愛知の津島神社、福岡の櫛田神社のほか、八坂、八雲、須賀、須佐などの社名をもつ神社がほぼ全国に分布している。兵庫県、千葉県、福島県、茨城県、東海圏などに多い。

令和二年夏、京都の祇園祭では、山鉾巡行や神輿渡御等を中止するが、本義に鑑み祈りを捧げたといい。日本書紀や風土記に源を発し、千年以上の歴史をもつ疫病鎮めが今も続いている。その間の継続や復興、また広がりが発揮された人びとの願いと熱意の力を思い起こすとき、積み重ねられた文化の厚みを感じることができる。医学とは別の意味で、私たちに疫病克服に向けた心の強さと優しさをもたらしてくれるのである。



# 東国武士の御霊信仰

二〇二〇年春に始まった疫病とのつきあいは、長期化を迎えている。私たちは互いに助け合い共に生きることを試されているかのようだ。

前項では、日本書紀の英雄スサノオを祭る京都祇園社（現・八坂神社）を中心とする疫病除災の祇園信仰を取り上げた。祇園祭の起源は、平安時代の御霊会という行事にあると言われる。疫病の流行期に催された。それが発展して神社の恒例的な祭祀となるものも現れた。その典型が祇園社である。

中世からの御霊の信仰は少し様相を変える。生前に強い個性や意志を発揮した人物の荒ぶる靈力を神社に祭り、地域の守護神としたものである。その代表例の一つが、勇猛果敢な逸話で知られた鎌倉権五郎景正である。

平安中期、源氏の棟梁であった源義家が陸奥出羽方面に遠征したときのことである。「後三年の役」と呼ばれる合戦に、相模国で莊園を開拓・経営していた鎌倉権五郎景正（景政ともいう）という武士が従軍していた。『奥州後三年記』という古い記録に景正の奮戦ぶりが描かれている。現代文にて紹介しよう。

金沢という砦を義家が攻めた時、城兵の弓矢が雨のように射かけられ攻め手に負傷者が多く出た。相模国の住人、鎌倉権五郎景正という者、先祖から名高い強者で、齡僅かに十六歳。多勢の敵を前に

して捨て身で戦っていた。敵の矢で右目を射られつつも、反撃して敵を打ち取って、一旦自陣に退いた。兜を脱いで「景正手負いたり」と倒れ込んだ。そこに同じ相模の三浦平太郎為次という者がいた。為次が皮の靴を履いたまま景正の顔を踏みしめて矢を抜こうとした。景正は横たわったまま刀を抜いて鎧の下部から為次を突こうとする。為次は驚いて「なぜこのようなことをするのか」と問う。景正は「弓矢に当たって死ぬのは武士として望むところだ。なぜ生きながら足にて顔を踏まなければならないのか。それならばそなたを敵として、ここで死ぬ」と答えた。為次は舌をまいて黙ったまま膝を屈め、顔を押さえて矢を抜いた。このことを多くの人が見聞し、景正の高名はいよいよ比類ないものになった。

このような伝説をもつ景正を祭神として祭る御霊神社は、神奈川県藤沢市、鎌倉市、横浜市西部に分布している。藤沢市はその昔相模国高座郡であり、横浜市西部とは現在の戸塚区・泉区・栄区であり、かつて相模国鎌倉郡に属していた区域である。

景正は桓武平氏の出身であった。現在の鎌倉・藤沢地域の領主となり、伊勢の神宮に荘園を寄進して、この地に地盤を築いた。

江戸後期の地誌『新編相模国風土記稿』によれば、これら御霊社は村の鎮守となっており景正伝説も語り継がれ伝承されている。その理由を考えてみる。

地域の共同体を維持していくためには助け合いが必要だ。助けられる側は弱っているが誇りも持っている。助ける側も助けられる人の尊厳を大切に思い、そのように振舞ってこそ共助・共生の関係となるのではないか。

このような祭神が、さまざまな厄災から人びとを守ってくれるものとして祭られてきたのである。なお、磯子区内洋光台の若宮御霊神社では、鎌倉権五郎景正は祭られていない。祭神のなか、少彦名命（すくなひこなのみこと）は、神話の中で国づくりに貢献したとされているが、病氣治しの神さまとしても知られている。

## コロナ禍からの復活と再生

令和二（二〇二〇）年はコロナ禍のため、磯子区内でも多くの祭が大幅な縮小や中止を余儀なくされた。初詣では、密を避けての参拝を呼びかけるなど、知恵をしぼっての対策がとられた。

遡って令和元（二〇一九）年は台風などの自然災害があった。神社でも被害があり、復旧への対応も何社かで行われている。古来この列島では自然災害や疫病等が頻繁にあった。私たちの祖先たちはそれを乗り越えて今日の私たちへと引き継いできてくれたのだ。磯子区内の神社や祭りを担っている方々のお話を聞くと、今あることがずっと続いてきたわけでない。時代の変化や災いにあいつつも、気持ちをあわせて復活・再生し新しい力が吹き込まれてきた。

今日の状況は楽観できるものではないけれど、地域の社や祭は心のよりどころとして、また次の世代に伝えられていくだろう。これらは、地域で暮らす私たちにとって、なくてはならないものとして復活・再生されてきた。そんな歩みがDNAとして何代もの長きにわたって、この地域に組み込まれているからである。

各原稿の初出は以下のとおり。寄稿にあたり磯子区の事例等を適宜加筆、修正した。

「村の鎮守さま」（月刊短歌誌『麓』平成三十年十二月号）

「さまざまな氏神さま」（月刊短歌誌『麓』平成三十一年二月号）

「神さまとその居場所」（月刊短歌誌『麓』令和二年四月号）

「町を清める『榊神輿』」（月刊短歌誌『麓』令和元年十月号）

「海辺の神社と山岳信仰」（月刊短歌誌『麓』令和二年二月号）

「戦後に再建された七神社」（月刊短歌誌『麓』令和二年十二月号）

「祭礼行事、神輿と山車と囃子の話」（月刊短歌誌『麓』令和三年二月号）

「崇神天皇の疫病対策と克服」（月刊短歌誌『麓』令和二年六月号）

「祇園祭と疫病退散」（月刊短歌誌『麓』令和二年八月号）

「東国武士の御霊信仰」（月刊短歌誌『麓』令和二年十月号）

## 巻十五の神社と祭り

令和2年度（2020年度）

杉劇アート de 伝承プロジェクト調査・記録プログラム報告書

発行日 令和3年3月1日

企画・発行 横浜市磯子区民文化センター杉田劇場

〔公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／特定非営利活動法人チーム杉劇／有限会社アイコンクス／株式会社ニックスサービス共同事業体〕

助成 一般財団法人 地域創造

住所：〒235-0033 横浜市磯子区杉田 1-1-1 らびすた新杉田 4階

電話：045-771-1212 FAX：045-770-5656

E-メール：sugigeki@yaf.or.jp URL：http://WWW.sugigeki.jp

栗木神社



根岸八幡宮の神神輿





(上町) 白山神社



金山神社



若宮御霊神社



氷取沢神社の狛犬



上中里神社の石塔





熊野神社のお囃子



峰白山神社



森浅間神社の花山車



杉田八幡宮の神輿

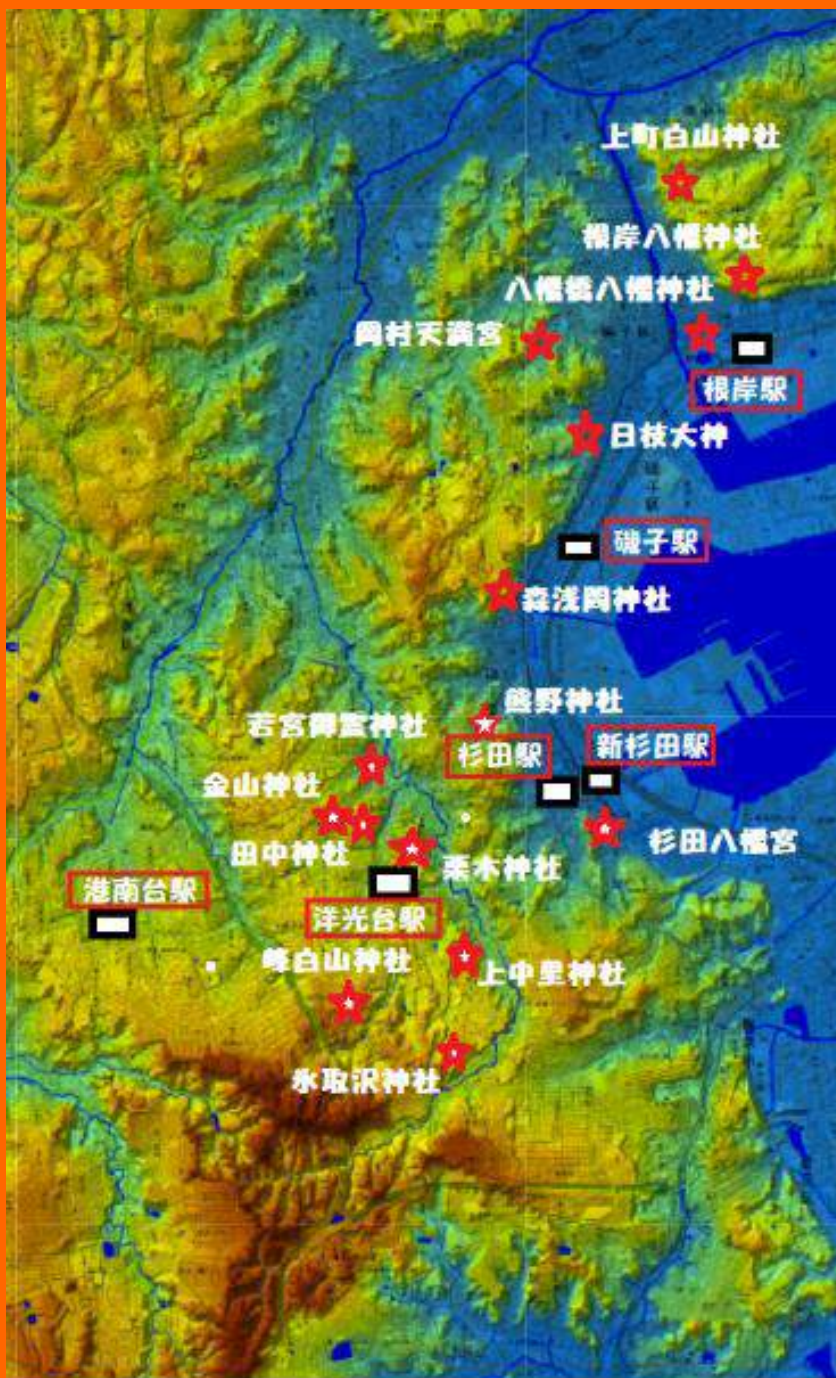


岡村天満宮



田中神社

# 磯子の15神社



---

---

## 壹十五の神社と祭り

令和 2 年度（2020 年度）

杉劇アート de 伝承プロジェクト調査・記録プログラム報告書

発行日 令和 3 年 3 月 1 日

企画・発行 横浜市磯子区民文化センター杉田劇場

〔公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／特定非営利活動法人チーム杉劇／有限会社アイコニクス／株式会社ニックスサービス共同事業体〕

助成 一般財団法人 地域創造

住所：〒235-0033 横浜市磯子区杉田 1-1-1 らびすた新杉田 4 階

電話：045-771-1212 FAX：045-770-5656

E-メール：sugigeki@yaf.or.jp URL：http://WWW.sugigeki.jp

---

---